



平成 28 年 12 月 15 日 幸重社会福祉士事務所にて

幸重 忠孝さん

(幸重社会福祉士事務所 代表)

岡山県出身。花園大学社会福祉学部卒業。大学時代は、ほとんどボランティア活動に明け暮れ、山科醍醐こどもひろば（現在は、NPO法人）に関わっておられました。その後、夜間の大学院に通いながら、日中は児童養護施設で二年間働かれます。大学院では、教育現場において福祉専門職が入るスクールソーシャルワーカーの実習をご経験された後に、町の中学校での相談員をする傍ら、大学の教員もするという二足の草鞋で活動されます。その後、滋賀県でスクールソーシャルワーカーとしての活動を行いながら、現在は大津を拠点として、地域でのしんどさを抱えた子どもたちを対象とした活動にご尽力されています。

自分だけを見てくれる人がほしかった

廣岡 まず、幸重さんが福祉に関わるきっかけを教えてくださいませんか？

幸重 私は、岡山県の出身で、一九七三年に生まれました。うちは父親が学校の先生をやっていて、母親が地域で、今で言うNPO活動をしていて、子どもの健全育成、文化の活動に取り組んで、ぬくぬくとした家庭環境の中で育ったんですね。親の背中を見て軽い気持ちで、将来は学校の先生にでもなろうかなと思っていました。ところが、中学三年生の時に、いじめに遭うんです。それ以降、学校では、辛い、しんどい日々を過ごすことになるんですけど、その時の学校の先生が良い先生だったんですよ。もっと悪い先生やったら人生変わっていたんじゃないか、と思うんですけどね（笑）。今滋賀県内でも、いじめの問題は色々力を入れている。大人って、何か困ったら親や先生に相談したらいいと思うことが多いと思うんですけどね。これはあくまで主観ですが、自分の場合は、絶対にそのことを一番知られたくなかったのが、家族だったんです。家では、三兄弟の一番上だから、偉そうな兄をやっているのに、学校でいじめられていることなんて絶対に知られたくなかった。

廣岡 確かに、それは知られたくないですね。

幸重 次に、学校の先生に相談すれば良いとよく言われますが、いじめって、今は被害者の立場からの話をしているんですけど、被害者になるまでは加害者の立場にいたわけです。例えば、クラスで障害をもっている子が、いじめられているのを見て笑っていたんですよ。からかっているのを見て自分も一緒に笑って笑っていたし、今考えるとひどいことをしていたなって思うんですけどね。自分が実際に当事者になって初めて苦しさがわかったんです。そして、自分が加害者の時に先生から指導されていじめをやめたことがなかったのも、先生に言ったところで解決しないと思いつながら、担任の先生が良い先生だったから、思い切つてその先生に相談をするんですけどね。ただ、結局安心、安全な学校生活は戻って来ることはなかったんです。色々といじめがなくなるように取り組んでくれましたが、何か全部ちぐはぐなんですよ。その時、先生が一生懸命やってくれているのになぜ上手くいかないのかを、中学生の自分なりに考えて悟ったんです。学校の先生って集団を見る仕事をしていて、いじめられている僕の先生でもあるけど、いじめている子たちの先生でもある。だから最終的には、みんなが仲良くクラスの中で過ごすことがゴールなんですよ。

廣岡 ああ、なるほど。

幸重 そこで、親を見て将来学校の先生に簡単になろうと思ったけど、これは大変な仕事だと思ったわけなんです。あと、そのような経験をして、自分は自分だけを見てくれる人がいればよかったのと思ったんですね。そういう体験をしながらも、学校を休まずに行けたのは、母のやっていた地域での活動に週に一日行っていたからなんです。そこには、クラスの子は来たりはしないし、他の学校の子とかが集まってグループ活動をしたりして、今までの自分でいられる場所だったように思います。だから、今から思うんですけど、「地域の居場所の大事さ」をその時に知ったように思いますね。そこでは別に心のケアをされたかったわけではないし、ただ集まって本当にしようもないことをして楽しく過ごせる時間と場所が週に一回あることが、すごく自分にとって大事だった。それが今、地域で居場所づくりをしている大きな原体験です。

挫折、現実を見ながらも理想を志す

廣岡 そういった中学校での原体験を受けて、福祉の道に進まれたんですか？

幸重 高校時代に将来のことを考えていた時に、たまたま

おじさんが福祉の仕事（特別支援学校の先生）をしていたこともあって、しんどいと感じている子どもにも寄り添って、その子だけを支える仕事って、福祉の仕事じゃないのかなって考えるようになりました。でも、当時は福祉を学べる大学は少なく、岡山を出て関西にある花園大学で四年間、社会福祉を勉強することにしたんです。と言いながらも、大学の授業はあまり行かなくて（笑）。

廣岡 そうだったんですね（笑）。他に何か熱中されていたんですか？

幸重 当時は、ボランティアばかりやっていたんですよ。だから、京都に来た時も、山科醍醐こどものひろばに入っで、地域の子どもを集めて楽しい活動、例えば夏はキャンプに連れて行ったりしていたんです。そんな中で大学の授業を受けた時に、スクールソーシャルワーカーという仕事があるということを教えてもらったんです。学校の中にソーシャルワーカーという専門家が行って、働くような仕事もあるんだということですね。ただ当時、その仕事は日本では仕事として成立してなかったんです。でもその時に、「これだー！」みたいに思って、スクールソーシャルワーカーの仕事をしたという気持ち芽生えたわけですね。それで、大学を卒業するくらいの時期に、スクールカウンセラーの活用事業を文科省が始めて、カウンセラーという

外部の専門家を学校に入れようという流れが日本でも出てきたので、とにかくそれでもええかと思つて、臨床心理士の資格が取れる大学院を受験するんですけど、軽く大学院の受験を失敗するんですよ。そこから一年大学院浪人（心理系の大学での研究生）して、秋にはかなり万全の態勢を置いて大学院受験に挑みました。たまたまその試験の時の面接の先生が二人ともよく知っている先生だったので、その先生から言われたのが、「君、心理向きじゃないよねー」と一言。

廣岡 面接の場面で言われたんですね（笑）。

幸重 その時は、かなりショックを受けて、しばらく落ち込んで自堕落な生活をしていました。その頃、母校の花園大学で「社会人向けの大学院を開校するから、受験しないか？」と学生時代のゼミの先生から薦められて、夜間だったんですけど行くことにしたんです。その時、大学院に通いながら、とにかく福祉の現場に入ろうと思つて福祉人材センターに行くと、とある児童養護施設が「急募！」と貼つてあったので、そこに行くことにしたんです。

廣岡 それはまた、すごい即決なされたんですね。

幸重 だから、私の社会福祉の社会福祉職のスタートとしては、そこでの二年間っていうのがあつて、児童福祉の現実を知るわけですね。職員が、ものすごく管理的で子ども

たちを押さえつけることをして、私としては「子どもの権利！」と意気込んでいる中で、色々ありえへんと思うようなことを目の当たりにするんです。僕も結構言う人やったから、職員会議がある毎に、言い合いになったりもして、そうなりながらも何とか福祉現場で仕事をしていました。でも、その子どもたちからは、生活を共にすることで色んなことを教えてもらったり、施設の子どもの現実の厳しさも学ばせてもらいましたね。

大学院では実習があつて、研究テーマに合わせて現場に行きなさい、みたいな感じだったんですね。その時の大学の先生が、大学の授業でスクールソーシャルワーカーのことを話した先生だったんですよ。それで、将来自分はスクールソーシャルワーカーになりたいと思つているということをお伝えたら、滋賀県ならいけるかもということ、実習先を見つけるために滋賀の教育委員会にお願い周りをするんです。でも、教育委員会からすればわけがわからんと言われるわけです。実習と言えば教育実習なので、福祉実習と言われてもちよつと…と断られ続けていたんです。そんな中で、高島の安曇川町の教育委員会が、よくわからんけどと言いなながらも快諾してもらえて、大学院の実習で安曇川町の教育委員会でスクールソーシャルワーカーとして実習をさせてもらえたんです。

廣岡 そのよくわからない状態でも、受けてもらえるって
いうのは、すごいですね。

幸重 そこで、実習のプログラムも自分で作って、色んな
ことをやっていったんです。そうすると、教育委員会も最
初と見方を変えてくれて、興味を持ってくれて、うちの町
の中学校に相談員として来てくれないかと声をかけてくれた
んですね。ところが、その町の教育委員会が予算とれたの
が週一日だけだったので、迷ったんですけど、やっぱり自
分の一番したいことだったので行くことにしました。でも、
生活もしていかないといけないので、当時福祉系の大学や
学科がたくさん出来てきていた頃で、大学教員の公募も多
くて、上手いこと母校の実習室の教員募集があったんです。
大学の教員の仕事は、フルタイムで週五日仕事なんですけ
ど、一日は研究日を与えられていて、その日を活用するこ
とで学校での相談員が出来たので、大学の先生をしながら、
中学校で相談員もすることにしました。

念願のスクールソーシャルワーカーとなって…

廣岡 滋賀県内では、いつ頃からスクールソーシャルワー
カーとして働かれるようになったのですか？

幸重 滋賀県では、二〇〇七年度にスクールソーシャル

ワーカーの仕事が事業化されたので、その年からその仕事
に携わることになるんですね。初年度は、月に一、二回く
らいの仕事だったので、大学の教員をしながらやっていま
した。二〇〇八年に文科省が、スクールソーシャルワーカー
活用事業を始めて、滋賀県は前年度から先駆けてやってい
たこともあって、週三日仕事ができる状況になったんです
ね。その頃、働いていた大学が福祉系から教育系に変わる
時期だったこともあり、ちょうどそろそろ辞め時と考えて
いたこともあったので、辞めてスクールソーシャルワ
ーカーの仕事に専念することにしました。その時から今も継
続して、学校現場で仕事をさせてもらっています。学校の
中に入って、学校の中でできることはすべきだと思ってい
るので、学校の中で環境改善などは頑張ってます。やっ
ついで、難しい家庭事情があるケースの時は、福祉とつな
がって、要保護児童対策地域協議会というネットワークを組
んで支援しています。でも、そこでは「見守る」だけになり
がちなんです。情報共有するだけで直接子どもに何かでき
る方法（福祉サービス）がないんです。結局、何かするの
はその子どもが通っている学校なんですね。だからネット
ワークを組んだとしても、学校からは不満しか挙がらない
わけなんです。一時保護の対象になる子どもはごく一部
のみで、その他のほとんどは地域の中でしんどい思いをしな

がら暮らししている。やがて、思春期くらいになってきて、学校に行かなくなつて、不登校やひきこもり、自傷行為が始まったり、非行に走つたりとかね。そうなたら今度は、警察とか医療が動きますよね。その流れは違うだろう、その手前で何とかしていたら、子どもたちの人生は変わっていたんじゃないか、と思いながらも何も出来ずこのジレンマを学校の中で抱えていたんです。その中でも決定的だったのが、夜なんですよね。夜は、学校の力ではどうにもならないです。あと、夏休みとかの長期休暇は、学校の先生の力ではどうにもならなかつたんですよね。

現場での課題を足掛かりに社会資源の創出へ

幸重 そういう中でも山科醍醐こどものひろばにもずっと関わっていて、学生時代のボランティアから社会人になつても役員として残っていたら、そこで世代交代が起こつて、二〇〇九年にこどものひろばの理事長になるんです。**齋藤** こどものひろばの活動には、その間継続して関わっておられたんですか？

幸重 そうですね。こどものひろばでは、ボランティアが集まつて、地域のこどものために楽しい文化活動や体験活動の場を三〇年近く作っていたんです。ただ、そこに来ら

れる子どもたちは、参加費を払えて、申し込みができて、送り迎えができる家庭なんです。その条件をクリアしてないと来られないんですよ。なので、この会の良さを活かしつつ、地域のしんどい子たちの受け入れができるような活動を、夜のこどもの居場所を作ろう、ということになったんです。それで、子ども生活支援センターというのを作つて、そこで夜のトワイライトステイとして子どもたちがやってきて、地域のボランティアの方々が関わるような活動がスタートしたんです。その時にやってみて初めて、関係機関の壁が厚いということがわかりました。学校や福祉は情報を持っていて、地域にしんどい子どもたちがたくさんいることはわかってはいるんですけど、新たに作った居場所を発信するためにパンフレット持っていたり、説明しに行つたりとかすると、反応は良いんですけど、絶対ケースはつないで来なかつたですね。

廣岡 必要だ、と思つて居場所を作つたはずなのに、肝心の子どもたちをつないでもらえないという状況だったわけですね。
幸重 そうですね。あともう一つ、活動を作る上での意識として、この会だけでしかできない活動はやめよう。しんどい子どもたちは、どの地域にもいるんだから、誰もが真似できるモデルを作つて、それを日本中に広げることが

社会福祉士である自分のミッションだということを大事にしていたこともありました。その意識で、活動の仕組みを作ったので、この事業を始めてから、実際に他の団体でもしたいっていうところが出てきて増えていくんです。でも、みんなつまづくのは関係機関との壁、地域の中で民間が居場所を作っても、関係機関が手をつながないんですよ。そこで、これは間をつなぐ地域の専門機関も必要だと思って、独立型の社会福祉士事務所があるということを知ったので、二〇一二年にこどもひろばとは別枠で事務所を立ち上げました。関係機関とか専門機関とか向けに、うちは社会福祉士の事務所、守秘義務もちゃんと持っていて、契約もきちっと出来ますということで、ケースの入り口をそこで受けて、実際の居場所活動は、民間の居場所の中でやっていくみたいな仕組みで山科に事務所を設立して、これは、ある程度の成果は出ましたね。

廣岡 なるほど。同じ民間でありながらも、あえて社会福祉士という専門職の名前を看板に掲げること、つなげてもらいやすくなる方法で取り組まれたわけですね。

幸重 あとは、どこの団体でも出来るようにするために、行政の補助制度にして、やりたいという民間団体が居場所づくりをできるようにしないといけないということで、議員の方、行政の方に働きかけたり、マスコミを使ったり、

啓発イベントを開催したり色々やって、京都での取り組みは、京都府が制度化をしてくれるようになったんです。そんな中で若い職員も育ってきていたということもあって、理事長と事業担当の役を引き継いだんです。その後、僕は元々滋賀に住んでいてスクールソーシャルワーカーもそこでやってるので、滋賀にこそ子どもの居場所や拠点を作っていきたい、と思っていたこともあったので、二〇一四年からは滋賀県で夜の居場所づくりを始めました。活動のパッケージは京都で活動したものを持っていたので、その方法で、大津市社協と共に生活困窮の子どもの居場所活動を始めていきました。学区社協のボランティアに居場所づくりについてご協力を願ったところ、地域のご年配、シルバー世代の方々は、夜に家を空けることに抵抗感があったりして、夜の居場所づくりのボランティア協力が難しかったんです。

齋藤 確かに、なかなか夜に家を空けるのは、抵抗感ある方が多そうですね。

幸重 夜も大変だけど、土日や夏休み、冬休みなどの休日も、家庭がしんどい子どもたちは大変だということで、学区社協のボランティアさんたちは、大津市内では寺子屋プロジェクトと言って、学校が休みの日に学びと食と遊びの居場所を作っていくようになり、今で言う子ども食堂の取

り組みになっていきます。このように、大津の中で夜の居場所と夏休みや冬休みの地域の居場所という二つの居場所づくりを始めると、今度は滋賀県で縁創造実践センターのプロジェクトが立ち上がって、色んなプロジェクトがある中の、一つの居場所プロジェクトの中に呼ばれたんです。それで、大津での取り組みを説明すると、縁の中でもしたという話になって、縁は社会福祉法人が加盟しているプロジェクトなので、じゃあフリースペースという形で高齢者とかの施設を使って、同じように夜の居場所を作ろうと、「フリースペース」の活動が誕生したんですね。それから縁のリーディング事業となった「淡海子ども食堂」に関しては、寺子屋という形で地域の中で誰もが来れる居場所がモデルとしてあったので、同じように、地域の子が誰もが来られる食と学びと遊びの居場所となりました。ちなみに、トワイライトステイというのは、関係機関ともつながって、家庭的な規模で、少人数の子どもを見る活動なんです。必ず子どもの数以上の大人を配置するっていうのが、トワイライトステイの一つのポイントなんですけどね。机を囲んで一つ輪になれるぐらいの集団の規模で、家庭的な夜を過ごしたいんですね。やっぱり、子どもが来て、今日は楽しかったな、ほっこりしたなっていうのを一週間に一回。毎日ではなくても週に一回だったら、しんどい環境にいる

子ども指を折って頑張れるんですね。そういう形で、滋賀での居場所づくりを行っています。

全国にこどもソーシャルワークセンターを…

廣岡 今後の活動についても、お聞かせください。

幸重 滋賀では、もう一〇年近くスクールソーシャルワーカーをやっているのですが、滋賀で夜の活動を始めた時に、すぐに教育委員会が話に乗って来て、居場所と学校とつなぐ役割をスクールソーシャルワーカーが担えないかという話になりました。それで、よその自治体と違って、学校からも夜の居場所につないでいくルートを作っていくことが出来ました。全国的にも子ども食堂が出来ていたり、夜の居場所も出来ているんですけど、地域の民間活動が必要な子どもにつながれてないんです。でも、滋賀では、スクールソーシャルワーカーを活用してちゃんとつながるような仕組みを、そんな完璧なわけじゃないですけど、それなりに作ることができました。そして、そのような流れの中で、二〇一六年になってから、本格的に滋賀に事務所を構えてやってこうということ、大津市に拠点を移しました。今まで京都では、社会福祉士事務所という名前ですつとやってきました。でも、独立型の社会福祉士事務所って成年後

見がメインの事務所が多いので、この名称では子どもの活動として広がらないという課題が見えてきました。

齋藤 確かに、そのイメージが大きいですね。

幸重 あと、今は制度にない事業を行っていますが、ソーシャルアクションをして制度になった時に、行政から支援を受けやすくするために、NPO法人格を取っていいこうと考えて、こどもソーシャルワークセンターという名称にしていくことにしました。現在、全国各地に民間の手で、子ども食堂や、居場所がすぐ出来てきているけど、どこも必要な子どもや家庭をつなぐ地域の専門機関がなくて困っている状況があります。そこで、今後の展開として考えているのは、高齢分野だと地域包括支援センター、障害も相談支援事業が始まってきている中で、子どもは家庭児童相談室が市町に一つあるだけなんです。それだとエリアが広すぎると思うので、せめて地域包括と同じエリアくらいに一つ、子どものことに関する総合窓口として、公的なサービスだけでなく、インフォーマルな支援にもつなげていくような機能を持ったセンターを作る必要がある、と考えているんですね。ここがハブとなって、地域の中で子どもたちが生きていく、子どもは住み慣れた地域の中で、学校や家庭がしんどくても、地域の人や福祉の支援に救われたり、ほっと出来る場所と寄り添ってくれる大人が周りにいて

くれたりする中で、何とか暮らしていけたらいいのかなと思っっています。これから発信していく取り組みなので、先のことはどうなるかはわかりませんが、五年、一〇年後には、当たり前のように、地域の中にそのような機能を持ったセンターがあることを目指してソーシャルアクションをしていこうと考えています。

廣岡 これからもどんどん、新たなことに取り組んでいけるんですね。今日は、色々なお話を聞かせていただきありがとうございます。